

「フラテ」原稿



2004年

今年もフラテ執筆の季節となりました。認知行動学分野の教室構成員の数が増加傾向にあり、だいぶ雰囲気も変わり賑やかになってきました。例によりましてメンバーからの自己紹介です。

福島菊郎教授

「北海道大学も、いよいよ本年4月から法人化され、教官という名称も、教員と変わりました。私たち教員に対し、レベルの高い研究を継続し、発展させることが求められているのは、大学院化した北大医学部にとって、当然ですが、それだけでなく、教育にもこれまで以上の貢献することが、義務となっています。この一年間の当分野の教室員の移動につき、順不同でお知らせします。佐藤史江大学院生は、昨年よりリハビリ医学にもどり、3月に無事、医学博士の学位を取得しました。4月からは、斉藤展士保健学科助手が、博士課程社会人大学院生として新たなメンバーになりました。安田円共通技官は、第1生理(時間生理学分野)の、ほぼ専属技官となり、平野征子技官が、当分野を受け持っています。海外との研究交流として、アトランタ・エモリー大学の Mustari教授との共同研究と、シカゴ大学医学部のMcCrea教授との共同研究を、それぞれ、継続しています。いずれも、彼らが、こちらに来て、こちらのテーマに基づいて実際に実験してくれたので、有り難いことと思っています。これらの研究には、赤尾鉄平大学院生、津布久宗大学院生(耳鼻科)、セルゲイクルキン助手、福島順子保健学科教授が参加しています。」自己紹介ありがとうございました。

田中真樹講師

「米国テロの直前に留学から戻り、はや3年が過ぎてしまいました。留学中の3年間と較べるとどうも仕事はかどらず、焦りを感じるこの頃です。この4月からは細菌学教室から異動してこられた平野技官に実験の補助をしていただけるようになり、少し状況に好転の兆しがみえてきたような気がします。ここ数年は運動性視床の機能を探っていますが、近いうちにまた大脳皮質にも手を出したいと考えています。私生活のほうはコドモたちにかこまれて楽しく過ごしていますが、徐々に酒量と体重が増えて気になっています。」 研究などについて議論をさせてもらっています。私にとってはとても刺激になっています。

Sergey Kurkin助手

「Originally I am from Rostov-on-Don, Russia. I got my PhD in biophysics in 1983. Since 1995 I joined the Laboratory of Sensorimotor and Cognitive Research at Hokkaido University Medical School. I am working on development of computer-based system to study the neural mechanisms controlling eye movements. This system comprises 3D virtual targets presentation, data acquisition, data analysis and computer modeling.」職員になられてから授業を持つようになり研究室だけでなく教室でも彼の話す英語が聞こえてきます。

平野征子技術職員

「本年4月より統合生理学講座に配置換えになりました。2ヶ月間2分野共通の職員として、6月からは認知行動学分野専属となりました。右も左もわからぬ(歳をとった)新人を 暖かく迎えてくれた教室のみなさんに感謝しています。現在半年が過ぎたところでまだまだ物の名前も覚えられずにいますが、根が図々しいので、そのうち気がついたら…教室の ヌシみたいな顔をしているかもです。」他の教室員の皆さんも喜んでおります。

安田円技術職員

「キ?キキッ?キーキャーキャキャッ。ギャーギャギャッ。キキキッ、キーキーキキッ。訳:え?安田さん?よくやってると思うよ。ただちょっと朝ごはん遅いんだよね。こっちは7時前にはもう起きてんのにさ…。」なかなかユニークな自己紹介でした。動物たちからの文句にもめげずがんばってください。天野和子事務官にも原稿を依頼したのですが、「ここ何年間かフラテの原稿は書いておりませんわ」と言われてしまい途方に迷ってしまいました。今年も多くの先生方が当研究室で研究をされています。

宮本環客員研究員

「MRI装置の医歯学総合研究棟への移転を終えてほっとしたのもつかの間、思いもかけぬトラブル続きで頭が痛い。機械の調子は悪いが、研究は盛り上がっている。成果もなんとか出つつある。今は時間がないのが最大の問題。」

赤尾鉄平大学院生

「院生生活も遂に4年目に突入しました。動物たちとも4年も付き合うとさすがに言葉が分かります。よく必要以上に毛を刈って周りから色々言われますが、彼らはそんなこと気にしていないと言っています。そんな、彼らの協力もあってよい結果が徐々に集まってきました。あとは、これを魅力的なデータにくみ上げるだけなのですが…なかなか大変です。」

津布久崇大学院生

「当教室での研究と耳鼻咽喉科での前庭外来という、二足のわらじを履く生活を送っている。研究の方では、昨年よりChicago大学のMcCrea教授を交えた、輻輳眼球運動時の小脳片葉領域ニューロンの動きに関する研究に携わり、現在はその膨大なdataと格闘する毎日である。多忙なはずなのに、体重が増加の一途をたどるのが目下の悩みである。」

笠原敏史大学院生

「院生生活も折り返し地点を過ぎ後半戦に突入。マラソンに例えると少しずつゴールに近づいているとはず。きっといつかは下り坂があると信じているが、依然として上り坂。途中でリタイヤしないよう給水地点で十分な栄養(摂りすぎ注意)と水分(飲み過ぎ注意)を補給。沿道(家族や仲間)の声援を励みに、監督(教授)を信じ、これから勝負のラストスパートを乗り切りたい。オリンピックの日本選手に続きたい笠原(D3)でした。」

齊藤展士大学院生

「今年度から博士課程の大学院生として勉強させていただいている齊藤展士です。理学療法士ということもあり以前からヒトの姿勢制御について興味を持っていましたが、そのことも含め、脳と運動との関係を学びたいと思っています。最近はどうやく動物とも仲良くなり?トレーニングや実験ができる雰囲気になってきました。」

新田卓也大学院生

「これまでずっと臨床研修のみの生活でしたが、4月からこちらの教室で研究させてもらっています。ここでの勉強や動物の訓練、実験等はこれまでとは違うことばかりでとても新鮮で楽しいです。また同室の○尾君の行動を観察するのも日々の楽しみのひとつとなっています。でも時々動物が思うように動いてくれなくてしょんぼりもしますが、めげずに頑張っていこうと思います。」

この他、二人の医学部の学生さん岩井英隆君、吉田篤司君が研究室に来ており、抄読会や実験に参加しています。また、当分野に在籍していた新明康弘先生と佐藤史江先生が今年ご結婚されました。心よりお祝い申し上げます。

最後に、助手の山野辺貴信です。今年からはヤリイカを用いた実験でこれまでの研究を大きく発展させていきたいと考えています。この研究はパリ大学のPakdaman教授との共同研究で年に何日かはフランスに行き仕事をしています。また、岩井英隆君もこのプロジェクトに入っており、彼の頑張りに助けられています。我々は開かれた研究室を目指しています。面白そうだなと思う方はお気軽に研究室までいらしてください。
(文責:山野辺貴信)